

#### 四 鎌倉時代の形勢

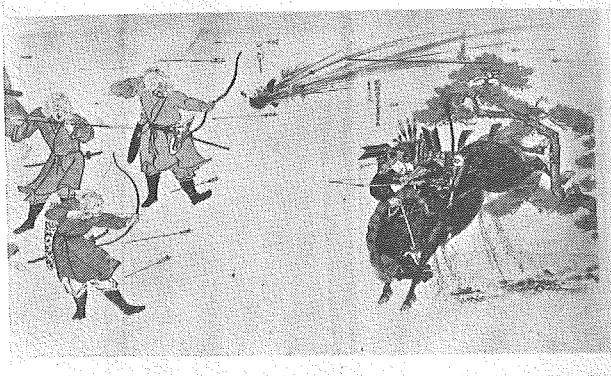
鎌倉幕府が開かれて武家による権力支配の時代に入るが、九州では太宰府におかれた鎮西探題が、肥前、筑前、豊前、豊後、対馬の守護も兼ねるようになった。

肥前で地頭になったのは、佐嘉郡龍造寺村に、文治元年（一一八五）藤原季家が入って地頭になり、高木宗家が国分寺の地頭になったものなどがある。又、小城郡晴気荘の千葉氏など他国から肥前に入った武士も多い。

鎌倉幕府による政治体制も、時の経過とともに次第にくずれはじめ、各地に群雄割拠の兆候があらわれて、地方武士の新たな興隆が出てくる。

ことに蒙古襲来による文永の役、弘安の役には、西国九州の御家人の戦闘参加による活躍があった。

文永五年（一二六八）以来数度に涉って、蒙古の国書が太宰府に送られて、威圧的な通告が強要されたが、幕府はこれに対して答えず、沿岸警備に当たった。文永十一年（一二七四）元と国号を定めた蒙古は、二万五千の兵、九百隻の艦船が壱岐、対馬を経て、松浦沿岸を襲った。わが軍は苦戦をつづけたが、一夜の嵐に艦船の多くが沈没して逃げ帰った。その後、博多、松浦方面の沿岸警備は、一段と厳しくなり、防塁の構築も大規模に行われた。弘安四年（一二八一）大軍を擁して、渡来した蒙古軍との間に、志賀島、壱岐等、各地で激戦がつづけられ



蒙古襲絵図（「元寇の研究」所載）

たが、再び、暴風雨に遭った蒙古の船団は全滅を喫した。この両役に、松浦党はじめ肥前の武士の多くが、沿岸警固に当たり、戦に加わった。大宰少弐、大友、菊池らとともに、高木、龍造寺等の名があり、おそらく川副郷の武士たちも、分担された警固役に当たり、戦闘に参加したものと思われる。

戦後、幕府は戦功のあったものに対して、論功行賞を行い、その功に応じて、所領や役職を与えた。肥前国内でも、多くの所領地が恩賞としてあげられたが、たとえば「龍造寺文書」の「弘安四年蒙古合戦勲功賞肥前国米多統命院配分事」の中に「河副木原内、一所六段……」などがある。これは、河副北荘、現在の北川副町木原の地に当たる。

#### 五 南北朝時代

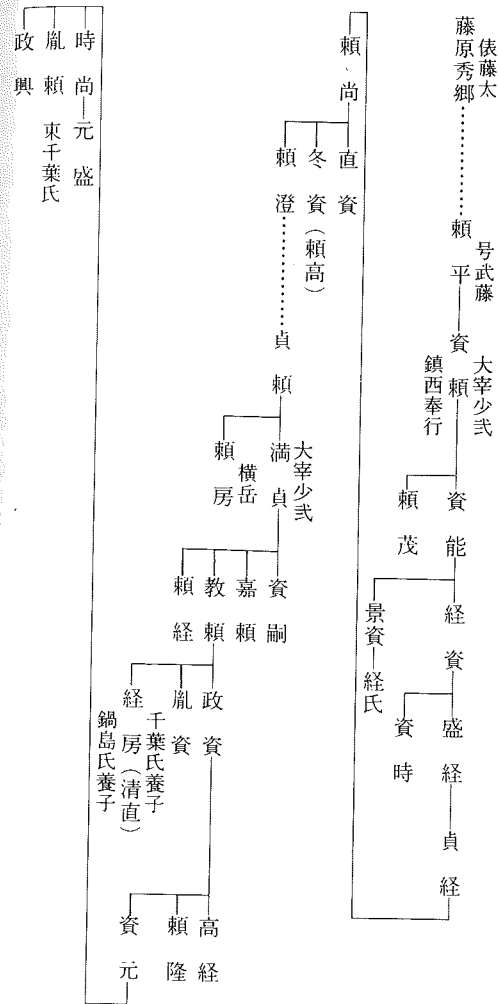
元寇はさいわいに撃退されたが、未曾有の国難であったため、鎌倉幕府にとっても致命的な傷手となった。やがて、皇位継承問題に干渉した執権北条氏を倒すために、後醍醐天皇の討幕運動が起こった。

九州においては、少弐、大友両氏が諸国の軍勢とともに、鎮西探題を攻めてこれを亡した。この時、龍造寺氏も綿旨を奉じて、郡内

の高木氏以下の御家人とともにこれに応じ、元弘三年（一一三三）五月、鎮西探題攻略に加わった。かくして幕府は亡び、全国的に諸探題も陥られ、天下は統一された。

ここで建武中興が成り、後醍醐天皇は京都に還幸、因縁深い諸社寺の所領を安堵された。これは、所領であることを確認して、これに保証を与えられたのである。肥前では、佐賀郡春日の高城寺を勅願寺とし、又その寺領を安堵した。すなわち、『高城寺文書』によれば、建武元年（一一三四）十一月十二日付で、内大臣吉田定房の御教

少弐氏略系図（佐賀市史第一巻参照）



書として、高城寺領の河副南北荘内極楽寺免田漆町五段、江上薬師堂免田壹町、河上仁王講免田五段（北方分）、米津土居外早瀉荒野壹所（南方分）等、川副荘内の土地が所領として安堵されている。<sup>(2)</sup>

しかし、やがて足利尊氏が謀反し、南北朝時代に入る。九州では太宰府にいた少弐氏をはじめ、豊後の大友氏、薩摩の島津氏などが尊氏側についた。肥前の豪族、龍造寺氏、高木氏、千葉氏なども、少弐氏との関係で北朝側についた。南朝側には肥後の菊池、阿蘇や松浦党があつて攻防をくり返した。尊氏が京都に入ると、諸寺とともに、高城寺の寺領知行地を復活させた。<sup>(3)</sup>『高城寺文書』には、

肥前国河副荘内極楽寺別当職兼免田等、同米津早瀉荒野等安堵事  
と、建武三年（一一三三）十二月十一日付で安堵状を与えている。

尊氏は、九州探題に一色範氏を当てたが、少弐氏がこれを喜ばず、対抗したので、一色氏は京都に去った。

注(1)肥前要略

(2)高城寺文書 五一号(前出)

(3)高城寺文書 五八号

## 六 室町時代の佐賀豪族

小城の千葉氏は下総平氏に属し、その後裔常胤が小城郡晴気荘地頭職として世襲した。六代の後、宗胤が肥前千葉氏となった。その後、次第に勢力を伸ばし、長祿三年（一四五九）には、杵島郡長嶋荘に知行安堵し、その